

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：37102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770127

研究課題名(和文) プルーストのテキストにおける古典主義演劇

研究課題名(英文) The references to classical works in Proust's novel

研究代表者

松原 陽子 (MATSUBARA, YOKO)

九州産業大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10610371

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、プルーストが小説に古典主義演劇を取り込む手法を分析した。本研究の目的はプルーストの小説の特異性を明らかにすることである。そこで古典主義演劇を取り込んだ同時代の小説、たとえばアナトール・フランスやゾラの小説とプルーストの小説を比較した。当時の古典主義演劇に関する批評はプルーストが古典主義演劇を小説に取り込む手法に影響を与えていることを示した。草稿資料調査により分析を深化した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I tried to show how Proust referred to well known classical books in his novel. The purpose of this study is to point out the originality of Proust's novel. With this purpose in mind, I compared his novel with some others written by Anatole France and Emile Zola in which one can find many references to classical works. I have tried to show how the comments made about classical works influenced Proust's way of quoting passages of other writers in his novel. The present research into his manuscripts has deepened this analysis.

研究分野：フランス文学、演劇

キーワード：プルースト 小説 演劇 生成過程 批評 文化的背景

1. 研究開始当初の背景

これまでのプーレスト研究では、プーレストがラシーヌの悲劇を小説『失われた時を求めて』に取り込む際の文学的手法を同時代の文学作品の手法と比較する視点がなかったと思われる。そこで、研究代表者は、19世紀から20世紀に書かれた小説において、ラシーヌの『フェードル』という主題がどのように扱われているかという問題の考察に取りかかった。

他方、プーレストは、ラシーヌの『フェードル』に限らず「古典主義演劇」を愛読しており、その小説に古典主義演劇作品や演劇の要素を取り込んでいる。にもかかわらず、プーレストのテキストにおける「古典主義演劇」については、網羅的な分析が行われていない。そうした欠落を補完するために本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究では、「古典主義演劇」という主題をめぐって小説家プーレストが用いている手法を探り、『失われた時を求めて』の独自性の一端を明らかにすることを目的とした。

そのため、『失われた時を求めて』と同時代の小説を分析し、それぞれの手法を比較していった。とりわけ、プーレストの文学的手法を探るために、『失われた時を求めて』については、その生成過程を綿密に辿り、分析を深化する必要があった。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、文化的背景が変化していく中で、プーレストがいかに同時代の潮流と歩みを共にし、そこからどのように新しいものを生み出したのかという問いに対する答えを導き出すことを目的とした。

3. 研究の方法

以下の3点の方法に基づいて研究を進めた。

(1) 草稿を含め、『失われた時を求めて』における「古典主義演劇」の引用について、小説の主要モチーフや登場人物のイメージとの関連を考察した。それぞれの引用が小説の内部装置としていかなる働きを持っているのかという問題を意識して、分析を進めた。

(2) 「古典主義演劇」という主題をめぐるプーレストの手法と19世紀から20世紀の複数の作家、なかでもゾラやアナトール・フランスの手法を比較し、プーレストの文学的手法の独自性を探った。また、演劇を小説に取り込むことでどのような効果があるのか、そして演劇の要素と小説のモチーフにいかなる関連があるのかを明らかにした。

並行して、プーレストが読んでいたと思われる当時の批評、なかでもジュール・ルメートルやアナトール・フランスの批評とプーレストの作品との関連を考察した。

(3) 『失われた時を求めて』の草稿資料を調査することで作品の生成過程を辿り、最終稿に至るまでの作家の推敲から、文学的な戦略を明らかにしようとした。

そのため近年、刊行されたプーレストの原稿帳の転写版も参考にした。特に『カイエ53』や『カイエ71』、『カイエ54』、『カイエ26』を参照し、登場人物のイメージの変遷と小説の結構との関連を探った。特に、『失われた時を求めて』の主要な登場人物であるアルベルチヌを分析対象とした。

4. 研究成果

本研究課題の研究期間中に、フランスで、大規模な国際シンポジウムが開催された。その際、研究代表者は招待発表を依頼され、引き受けた。また分科会の司会を依頼され、司会を務めた。シンポジウムの主題は本研究課題と関連が深く、研究成果を発表する機会となった。

研究期間中、本研究課題に関する複数の論文を学術誌に投稿し、査読審査の結果、複数の論文が学術誌に掲載された。論文だけでなく、本研究課題と関連のある書籍の書評を執筆した。2013年に国際基督教大学で開催された日本フランス語フランス文学会(全国大会)の20世紀分科会において、司会を依頼され、本研究課題に関連するプーレストやアナトール・フランスに関する発表の司会を務めた。

他方、本研究課題の内容と関連のある講演会を主催し、複数の著名な研究者に講演をお願いした。講演会は専門的な内容を専門家以外の聴衆にも分かりやすく伝えていただけるアウトリーチ活動の場にもなった。また、講演会後の質疑応答は活発な意見交換をする機会となった。講演前後の打ち合わせは、本研究課題を進める上で必要な情報交換をしたり議論をしたりする場になった。

研究発表や論文作成にあたり、複数の研究者に意見を求め、議論を重ねることにより、内容を推敲した。

以下に、主な研究成果の要約を記す。

(1) 2013年9月5日に、フランスのロータリークラブに招待され、ロータリー財団主催の講演会で「プーレストとバンド・デシネ」と題して、講演をおこなった。具体的にはプーレストの小説『失われた時を求めて』をめぐるバンド・デシネやグラフィック・ノベルについて分析した。

『失われた時を求めて』をイメージ化する試みは複数ある。その一つとして原作に忠実な再現を試みたバンド・デシネを紹介し、小説中の有名な場面「マドレーヌの挿話」について分かりやすく、解説した。他方、原作をもとに作者の自伝的な物語が語られているグラフィック・ノベルを紹介した。『失われた時を求めて』の第2巻のタイトル『花咲く

乙女たちのかげに』はこのグラフィック・ノベルの章のタイトルとなっている。また、作品の隅々に『失われた時を求めて』への言及が見られる。このグラフィック・ノベルについて解説することで、プルーストの小説における風景と登場人物のイメージとの関係を分かりやすく、説明した。

講演後は活発な質疑応答が行われた。

(2) 2013年11月15日に、フランスでパリ第三大学及びプルースト友の会の共催により開催された国際シンポジウムに招待され、「小説の中の演劇『失われた時を求めて』と『フェードル』の間テキスト的関連」と題し、発表した。このシンポジウムには、プルースト研究者だけでなく、アラン＝フルニエの専門家も多く参加し、活発な議論により、貴重な助言が得られた。

(3) 出張等による資料調査をもとに、作成した論文「アルベルチヌのイメージ」が学術誌『ステラ』第3号(査読有り)に掲載された。論文作成にあたり、資料調査により、テキストの生成過程を綿密に辿り、分析を深化する必要があった。近年出版されたプルーストの原稿帳の転写版『カイエ53』と『カイエ71』を中心にして、分析、考察をおこなった。

具体的には、『失われた時を求めて』における主要な登場人物であるアルベルチヌのイメージが語り手「私」の視線の下でどのように変化していくのかを分析し、そのイメージの変化が小説の構成といかなる関連を持つのかという問題を考察した。

従来、この問題は、ヴァリエーションを扱う校訂版の注釈でも、ほとんど注目されていなかったように思われる。そこで、本稿ではアルベルチヌと主人公「私」の関係をめぐり、物語が大きな展開を見せる場面を中心にテキストの生成過程を綿密に辿り、イメージが推移する諸相を具体的に分析することによって、「私」の目に映るアルベルチヌ像が小説の構成といかなる関連において変貌するのかを明らかにした。

特に、アルベルチヌの物語が大きな展開を見せる場面の描写の変奏が各草稿に繰り返し現れるという事実は、先行研究で看過されてきただけに注目に値する。この描写のヴァリエーションと最終稿をはじめとして、アルベルチヌをめぐるテキストの生成過程をたどり、どのような演出によって、この登場人物に重層的なイメージが付与されているのかという問題の一端を明らかにした。主人公である「私」の主観的な視線のもとアルベルチヌ像は変貌するのであり、そのイメージの修正が作品の展開とも密接に関連していることが明らかになった。

(4) パリの国立図書館およびソルボンヌ・パリ第4大学の図書館で草稿関連の資料

調査をおこなった。その調査をもとに、執筆した論文「記憶の中のアルベルチヌ 不在の人とそのイメージ」が学術誌『ステラ』第3号(査読有り)に掲載された。本論では、『失われた時を求めて』において、「私」の家から逃げ去った後、アルベルチヌのイメージが語り手「私」の視線の下でどのように変化していくのかを分析した。

注目すべき点として、『カイエ54』では、ラシーヌの悲劇『エステル』の引用が、小説の冒頭から現れる主要なモチーフと結びつけられていることが指摘できる。草稿におけるラシーヌの悲劇『エステル』の引用と結びつけられるモチーフについて考察した。『失われた時を求めて』における引用は小説の主要モチーフと結びつけられていることがあるが、一見並列しているように見えるモチーフが引用によって、分けられていることを指摘した。

アルベルチヌが持つ両義的なイメージが段階を経て現れるように設定されていることを生成過程における変更点を確認することによって、明らかにした。プルーストの原稿帳の転写版『カイエ54』を中心として、分析、考察を進めた。

(5) 資料調査をもとに、執筆した論文「アルベルチヌと海辺の少女たち 花咲く乙女たちのイメージ」が学術誌『ステラ』第3号(査読有り)に掲載された。『失われた時を求めて』において、アルベルチヌのイメージの変化はいかなる意味をもち、物語の進展とどのように関連するのかという問題を考察した。

本稿では、特に『花咲く乙女たちのかげに』をとりあげ、バルベックの海辺で少女たちに混じり「私」の目の前に現れた彼女のイメージの変化を、その生成過程も含めて分析した。浜辺で出会い、画家エルスチールのアトリエで知り合うアルベルチヌのイメージはその後語り手「私」の視線の下で変化し続ける。

多様な比喻を用いて表現される彼女のイメージは、「私」が海辺を離れ、パリで彼女と再会したときに、一瞬固定されたように思われるが、実際には両義的である。

草稿における表現が最終稿でどのように変更されているのか、生成過程における変更点を確認することで、アルベルチヌのイメージの変化が小説のなかで、いかなる意味を持つのかを明らかにした。

その際、プルーストの原稿帳の転写版『カイエ26』を中心に、分析、考察を進めた。

(6) フランスで開催された国際シンポジウム「1913年：ジャンルの混淆」において発表した内容が国際誌に掲載された。

プルーストの小説『失われた時を求めて』とゾラの小説『獲物の分け前』を比較し、それぞれの小説の中で、ラシーヌの演劇『フェ

ードル』がどのような役割を果たしているのかを分析した。小説における演劇が、小説というジャンルを不確定なものとし、登場人物たちを舞台の俳優に変えていく意味を探った。

具体的には、プルーストがラシーヌ悲劇を自作に取り込む手法の独自性を明らかにするために、『失われた時を求めて』とゾラの小説『獲物の分け前』を比較した。とりわけ、『スワン家の方へ』で最初に現れる『フェードル』の引用に着目し、分析を進めた。また、小説に差し挟まれた演劇作品がどのような役割を果たすのかという問題を中心に考察を進めた。

まず、『フェードル』をめぐって、ゾラの手法とプルーストの手法を比べることで、プルーストの作品の独自性を浮かび上がらせた。具体的には、ゾラの『獲物の分け前』では単に『フェードル』の筋や主題が取り込まれているのに対して、プルーストの『失われた時を求めて』においては、筋だけでなく、『フェードル』の詩句が取り込まれ、登場人物の心理的真実が表現されていることを指摘した。『獲物の分け前』と比較した際に『失われた時を求めて』に見られる特異性は、人間の複雑な心理を描くことができない自然主義小説に対する批判となっていることを明らかにした。

そもそも『失われた時を求めて』において、語り手である「私」は『フェードル』の告白の場面にあらゆる真実を見出す。ただし、『フェードル』において人間の真実が表現されているという指摘は、プルースト独自のものではない。本論では、プルーストが読んでいたアナトール・フランスやジュール・ルメートルの批評の中でも同様の言及が見られることを指摘した。またこうした言及は、プルーストが『フェードル』を自作に取り込む際の手法に影響を与えていると考えられる。

それでは実際、プルーストは心理的な真実を描くために、小説にどのように『フェードル』を取り込んだのだろうか。『獲物の分け前』でも、『失われた時を求めて』でも、演劇の仮装は小説の主要モチーフと結び付けられている。

ただし、『獲物の分け前』においては、こうした結びつきは限定的である。特に『失われた時を求めて』においては、登場人物に結び付けられる植物や演劇の仮装は登場人物の存在を両義的なものとする。また、『スワン家の方へ』で最初に現れる『フェードル』の引用によって、少年である語り手「私」がサンザシの花々と引き離される悲しみはフェードルの感情に重ねられている。

『失われた時を求めて』では登場人物は演劇の役を演じることによって、無意識に仮面を脱ぎさり、隠された姿と心理的真実を明かす。『獲物の分け前』に取り込まれた『フェードル』は、『失われた時を求めて』において、登場人物の心理や小説の主要モチーフと

より有機的に結びついている。『フェードル』の引用によって、プルーストは登場人物の内面、すなわち人間の心理的な真実を描き出すとしたのである。

(7) 中野知律著の『プルーストと創造の時間』(名古屋大学出版会、2013年)の書評を執筆した。この書評は cahier 16 (日本フランス語フランス文学会発行) に掲載された。本研究課題と関連のある内容の著書であり、研究期間中、論文執筆の際にも先行研究として引用した。

以上が主な研究成果の要約である。

本研究課題の研究期間の最終年度である2016年度は、学内業務の理由により出張が認められない期間があった。2017年2月13日から2月16日までの期間の出張が認められず、コメンテーターとして出席を予定していた長崎大学の研究会に出席することができなかつただけでなく、その後、2月後半から3月にかけても、出張が認められず、十分な研究資料調査をおこなえなかつた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

学術論文(フランス語)、「*Le Théâtre dans le roman : le lien intertextuel entre la Recherche et Phèdre Proust et Alain-Fournier. La transgression des genres. 1913-1914*», Honoré Champion, pp. 73-83、査読有り、2017年。

学術論文(日本語)、「アルベルチーヌと海辺の少女たち 花咲く乙女たちのイメージ」、松原陽子、『ステラ』第35号(九州大学フランス語フランス文学研究会)、査読有り、pp.137-147、2016年。

学術論文(日本語)、「記憶の中のアルベルチーヌ 不在の人とそのイメージ」、松原陽子、『ステラ』第34号(九州大学フランス語フランス文学研究会)、査読有り、pp. 155-165、2015年。

学術論文(日本語)、「アルベルチーヌのイメージ」、松原陽子、『ステラ』第33号(九州大学フランス語フランス文学研究会)、査読有り、pp. 81-92、2014年。

[学会発表](計2件)

《*Le Théâtre dans le roman : le lien intertextuel entre la Recherche et Phèdre*》、松原陽子、《1913 : La transgression des genres》(フランス・リエ＝コンプレー)(パリ第3大学およびプルースト友の会主催)、2013年11月15日。

《 Proust et les bandes dessinées 》、松原陽子、フランスロータリークラブ（アルジヤントウーユ）、2013年9月5日。

6．研究組織

(1)研究代表者

松原 陽子 (MATSUBARA YOKO)

九州産業大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10610371

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし